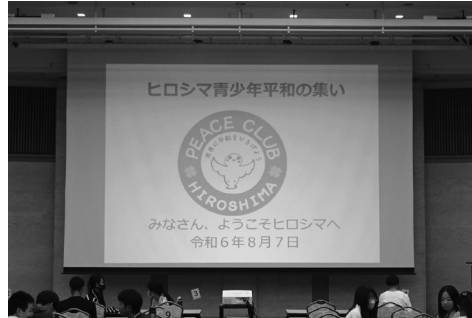


8：08

宿舎発

9：00

ヒロシマ青少年平和の集いに参加
（詳細は44～49ページをご覧ください。）



◎ヒロシマ青少年平和の集い

全国の自治体から派遣される青少年等が交流・意見交換を行う平和学習会です。被爆の実相や平和の尊さについて理解を深め、被爆地から平和のメッセージを一緒に発信しています。

15：03

JR 広島駅発

19：46

JR 津田沼駅着

ー広島インタビューレポートー

中学生・高校生の団員9名は平和記念式典会場で来場者にインタビューを行いました。質問項目、質問対象者などは各グループで自由に設定しました。

近藤団員・小菅団員・木堂団員



◆質問内容◆

- Q1. 式典に参列しようと思った理由。
- Q2. 日本の平和のために私達は何ができると思うか。
- Q3. 戦争がない世界の実現のために必要なこと。

◎1組目

A1	埼玉から来た。せっかく広島に来たということもあるが、子どもに「行ってみたら？」と言われ、タイミングもよかったので参列した。
A2	戦争はもちろん、小さなケンカもできるだけ起こさないという心がけが大事。大人も子どもも心がけないと。
A3	若い人たちの協力が必要不可欠。映画や書籍等で勉強すること。戦争や原爆に関する映画や書籍を読む機会が必要。

平川団員・伴団員・宮下団員



◆質問内容◆

- Q 1. 式典に参列しようと思った理由。
- Q 2. 戦争をどのように思っているのか。
- Q 3. 二度と戦争を起こさぬよう私達にできることは何か。

◎ 1 組目

A1	身内に被爆者がいたため。
A2	戦争は絶対にあってはならないことだと思う。戦争をやっているだけで腹立たしい。みんな仲良くやってほしい。
A3	相手のことを思うことが大切である。色々な国の人が仲良く話し合うこと。戦争国の人々が「平和」がどれほど素晴らしいものなのかを知ること。

◎ 2 組目

A1	父が被爆者で毎年この会場でお祈りをしている。今年も同様にお祈りをしに来た。
A2	戦争は反対である。戦争は人生を狂わせて、未来を壊してしまうものである。
A3	小さいことだとケンカをしないこと、大きいことだと核をなくしていくことだと思う。

田中ちより団員・各務団員・中村団員



◆質問内容◆

Q1. 式典に参列しようと思った理由。

Q2. 戦争についてどう思っているのか。

Q3. もし、総理大臣になったら戦争をしないために何をしますか。

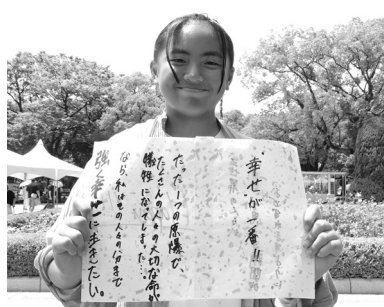
◎1組目

A1	大阪府摂津市から自治体として来た。例年参加している。
A2	絶対になくさなければいけない。広島ではじめて知ることが多かったけれど、今後も起こすべきではない。
A3	憲法9条を守り、国際交流を盛んにする。国同士が仲良ければ戦争は起きない。

◎2組目

A1	仕事で広島へきた。なかなかこのような機会がないので参加した。
A2	被害だけではなく、加害にも目を向ける。そこから学んで絶対に戦争は起こしてはならない。
A3	戦争についての被害や加害について多くの人に知ってもらうため、テレビなどで全国に講話を流す等をする。

平和への願いを込め、灯ろうにメッセージを書きました



◎灯ろう流しの種火

被爆から1ヶ月後、召集で広島県内の駐屯地にいた山本達雄さんが、叔父の店である本通商店街の金正堂書店にくすぶっていた火を叔父の形見としてカイロに移し、福岡県八女郡星野村（現在：福岡県八女市）の自宅に持ち帰り保存されていました。そして23年間山本家で守り続けられた後、昭和43年、星野村に引き継がれ「平和の火」として、慰霊碑の中で今もなお大切に保存され続けています。灯ろう流しの前に行われる「流灯式」の火種は、灯ろう流し実行委員会が毎年、星野村に出向き「採火」しているそうです。

ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました

ヒロシマ青少年平和の集いとは全国の自治体から派遣された青少年等が交流・意見交換を行う平和学習会です。今年度は全国から5団体の参加でした。

進行は広島市で原子爆弾による被害の実相や世界恒久平和の実現に向けた様々な活動を行っている中・高校生ピースクラブのメンバーです。

【内容】

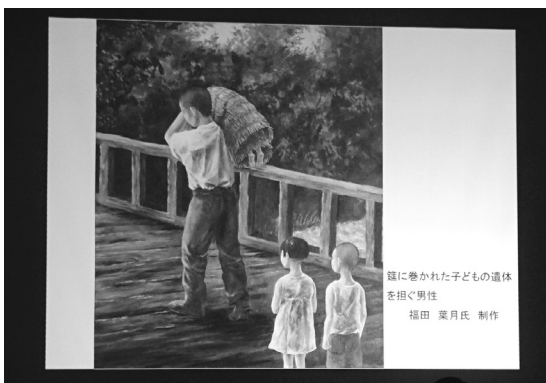
- ・原爆被害の概要説明（中・高校生ピースクラブより）
- ・八幡照子さんによる被爆体験講話
（詳細は50～54ページをご覧ください。）
- ・ディスカッション
「あなたの地元では、どんな戦争を経験して、それをどう伝えたいですか」
「核兵器をなくすために自分たちは何ができますか」



会場の様子



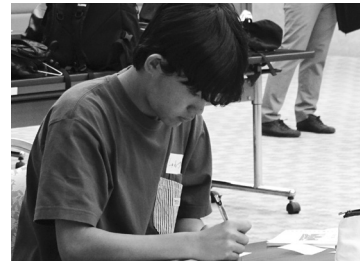
被爆体験講話スライド



被爆体験講話スライド



被爆体験講話：八幡照子氏



ディスカッションでは、様々な地域の生徒・学生が班ごとに分かれ、テーマ沿って討論を行いました。

【終了後】

習志野市へ帰ってきてから、各グループに分かれ、改めてまとめました！！



平川・中村団員によるまとめ

～青少年平和の集いについて～

◎ 太平洋戦争の千葉県 での被害

〈名前〉 平川 智規
中村 由佳

米軍が千葉市を標的とした空襲は
いくつかあったが特に被害が大きか
ったのは1945年6月10日と、
7月7日(セタ空襲)の2回であった。
この空襲では中心市街地の約7割
(231ha)が焼け野原となった。
死者は1595人被災戸数8904戸
被災者4万1212人に及んだ。



◎ 核廃絶へ向けて

将来を担う若い世代に被爆の実相を伝え、
身近なもの(ex, 本, 漫画, 動画)から学んでいくこと。

～中村～

感想

～平川～

今まで人と戦争や原爆に
ついて話したことが
なかった。なので、今回この
ような集いに参加し、新
たなことを学ぶことが
できた。この経験を生かし、
戦争廃止の力になれば
いいなと思います。

戦争や原爆への恐しさを
改めて感じました。
青少年の集いに参加し、
他県の人達と交流した。こ
れにより、それぞれの地
域によって考え方が全
然異なってくるんだと実
感しました。

宮下・小菅団員によるまとめ

広島青少年平和の集い

◎広島原爆の概要

ウラン235 爆弾 通称:リトルボーイ TNT爆弾約15000発分

爆心地から1.2km以内の人々はほぼ全員亡くなる。

◎地元の戦争体験をどう伝えるか

騎兵旅団司令部があった 空襲被害はあまりなかった

どう伝えていか→ 遺構を残すための保存活動をする

・その時代のVR等を作成し、体験する。

◎核兵器廃絶に向けて、自分達には何ができるのか

・小さな喧嘩も減らし、平和に過ごす。

・1人1人が、これまで起こったことを受け止め、活かす。

・SNS等を使い、多くのの人々に平和の尊さを伝える。

◎感想

小菅 茉弥

全国から集まった同年代の人と交流したことで、いつもとは違う角度から見た意見がたくさん出たので、新鮮でした。ピースクラブの皆さんが、とても優しく、自分の意見が言えなかったで可い人々と考えを伝え合うことの大切さを学ぶことができました。

宮下 寛司

平和の尊さをこれから世代につなげるために、このような集まりはとても重要だと感じました。

戦争はおろかなことだという認識が、もっと広まれば良いと思います。

今後の代表団の仕事も頑張ります。

平和の集いに 参加して



近藤 駿介
各務 紘斗

○ 戦争での被害と どのように伝えていくか

○ 七夕空襲

1945年7月7日 千葉市の中心市街地が被災

被災面積・205ヘクタール 死傷者・1204人

～各務～

被害などから感じたこと
をインターネットで広める

～近藤～

たくさんの人に語り継ぐ
相手によって口調表情を変える

○ 核兵器廃絶に向けて 何ができるか

核を兵器ではなく、自分たちの生活に役立てる。

幅広い年齢・他県・他地域の人との話し合いを繰り返し、後世に繋いでいく。

田中ちより・伴・木堂団員によるまとめ

広島青少年平和の集いを通して

○団員①田中ちより②伴悠羽
③木堂亜衣理

○平和の集いとは？

◎広島で行われる、小中高校生を
対象とした平和に対するディバ
ートの場です。

○私達のディバートの内容。

原爆デ
ーム

◎複数の班に分かれて行ったため、
様々な意見が出ました。

◎地元の戦争体験をどう伝えるか。

東京では空撃、広島では原爆と、多くの場所で被害が出ました。

その現実を伝えるために、その資料を保存したり、人の目につくよ
うにすることが大切だと思いました。

◎戦争や核兵器をなくし、平和のためにナニができる？

戦争のむづこさ、平和の大切さを考え後世に伝えていくことが
大切です。また、自国だけの事でなく、様々な国と共通の意識
を持つことが永い平和に繋がると思います。



被爆体験講話

3日目(8月7日)のヒロシマ青少年平和の集いでは、実際に広島で被爆された八幡照子さんによる被爆体験講話が行われました。八幡さんの当時の体験談を掲載いたします。



Profile やはた 八幡 てるこ 照子さん

1937年(昭和12年)生まれ。

8歳のとき、爆心地から2.5km離れた自宅から出掛けようとした時に裏庭で被爆。広島平和記念資料館の被爆体験証言者として、2019年(平成31年)4月から活動を開始。

当時の暮らし

私は大阪で生まれて、神戸あたりで幼い日を過ごしました。お正月から約11ヶ月後、太平洋戦争が始まりました。戦局が厳しくなって、私たちは、父が満州の天津に転勤したのをきっかけに、広島のおばあちゃんのところに引っ越しました。広島市は約430年前、広島城が建てられ商業都市として、学都として栄えました。そして、日本の二大総司令部を置く軍都としても栄えました。

己斐駅と山手側の間の己斐橋のたもとに私たちの家がありました。原子爆弾が投下される前の年、1944の春、私は、広島市己斐国民学校に入学しました。待ちに待った入学式の日、校門を入ると桜が満開でした。時折吹く風に、花びらはひらひら舞って地面を薄桃色に染めていきました。学校は毎日楽しかったです。

ラジオからは毎朝、軍艦マーチが流れ「大本営発表」という戦争の結果が伝えられます。大本営というのは、陸軍とか海軍の全体を指揮する日本の総本部のことです。「大本営発表、敵、航空母艦、撃沈せり。我が方に大なり損害なし」と決まって日本の優勢、勝っていることが伝えられました。これは虚偽報告でしたが、国民の多くは「ほしがりません。勝つまでは。」を合言葉に日本の勝利を信じていました。

私は戦後75年経って元神風特攻隊の偵察機の操縦士だったという知人から、当時の話を聞きました。17、18歳ぐらいの若い少年兵に、上官が「特攻隊に志願するものは、一步前に出よ」と言うと、パッとほとんどの若者は前に出たそうです。でも残っている子がいました。「貴様は、なぜ志願しないんだ!」上官が叱ると、「自分は、農家の1人息子であります。年老いていく親を残していくことはできません。」と答えました。「貴様はそれでも日本男児か!」とその若者は意識がなくなるまで殴られて、とうとう志願したといひます。今にして思えば、本当に絶望的な戦争末期だったのです。

青色の光

1945年8月6日、爆心地から2.5キロ離れた私たち己斐町の自宅には曾祖母と祖母、両親と姉、私、弟2人の8人がいました。

空は晴れて暑い朝でした。朝から警報が鳴っていましたが、解除になったかどうか隣の家に聞いてくるねと言って、裏庭に降り出たときです。ピカーッと空一面光りました。ものすごく青色の光。今の表現をすると、空一面が巨大な蛍光灯になったようでした。びっくりして私は目と、鼻と耳と、いろいろ塞いで地面に伏せようとしたのですが、そこで意識を失いました。

「みんなここに集まりなさい。」意識朦朧としている中、母の叫び声を聞きました。気がつくと、私は裏庭から廊下と8畳の居間を超えて玄関先まで吹き飛ばされていました。

お布団

頭がガンガン痛みます。母の声を頼りに這い出してみると、前が見えない程の土煙と倒れた襖に廊下のガラスが矢のように刺さっています。父は、崩れかかった階段を駆け上がって、2階の屋根が吹き飛び部屋の隅に飛ばされていた曾祖母を背負って降りてきました。母は押入れから大きな冬の掛け布団を引きずり出すと集まった家族の上に広げながら、「みんなで死のう。みんな一緒よ。」と悲壮な声で叫びました。母は今まで経験したことないこの状況に、ただならぬものを感じたのでしょう。第二、第三のこんな大型爆弾が来たらとても助からない、家族バラバラにならないように一緒に死のうと覚悟を決めたように私たちをお布団でくるんでくれました。お布団をかぶり肩寄せあったあのときの家族のぬくもり、子ども心に感じた家族の絆を私は今も忘れません。

幽霊の行列

外に出ると、シーンと異様な静けさでした。父は野宿するため、類焼しないようにお布団を河原に運び出している間、私たちは山手へ逃げることにしました。母が前を行き、ワーワー泣く弟の手を離さないように握って、歯を食いしばって、後を追いました。どんどん山手に向かいます。

空が暗くなったかと思うと、大粒の雨が降ってきました。大粒の雨はやがて叩きつけるような土砂降りとなって、私たちはずぶ濡れになりました。放射性物質に汚染された黒い雨ですが、私たちは雨宿りもできないので、父が待っている己斐の河原に行くため、山を降りることにしました。己斐の橋まで降りると、私たちは足がすくみました。爆風で髪が逆立った人、ちりぢりに焼かれた人、爆風で服が剥ぎ取られたり焼かれたり。あらわになった肌の皮は、ズルズルに剥けて爪の先にボロ布のようにぶら下がっています。爪の先で留まり、落ちないのです。みんな呻きながら泣きながら、ぞろぞろ歩いていきます。10人20人100人。たくさんの人が己斐の橋を渡って見えなくなっていく。第二、第三の爆弾があれば大変だとみんな恐れて山手側へと逃げていきます。私たちはその人たちをかいくぐりながら己斐の河原へ逃げました。向かってくる人たちは、まるで幽霊の行列のようでした。己斐の河原に出て、父と再会し「何とか大火傷を免れてよかった。でも家もつぶれて、これからどうしよう。」と困まっているところに、紅葉谷という山沿いの親戚が探しに来てくれて、私たちはそこへ避難しました。

おむすび

その日の夕方でした。紅葉谷の小川が何事もなかったように音を立てて流れ、ヒグラシが鳴いていました。地獄のようなところから一転、自然の優しさに触れて、とってもうれしかったことを覚えています。日が暮れて近所の人々が訪ねてきました。「わっ！」私の目はくぎ付けになりました。木の浅い箱に、おむすびがズラッと並んでいます。被爆者への炊き出しでした。もう、本当にうれしかった。朝は団子汁。昼、夕と食べていなくてお腹がぺこぺこだったので、そのおむすびの美味しかったこと、うれしかったこと。だから今も、何かあると私は炊き立ての熱々の真っ白いご飯を手の平を赤くしながら塩むすびやのりむすびを作り誰かに食べさせます。その時がとっても幸せです。市街地は、夜空を焦がすように燃えていました。山手から見ると、夜空を焦がすように燃えている火は、帯のように横たわって勢いをとめません。子どもですから、「わー。燃えているー！」と見ていましたが、今思うと、あの火の中で最愛の人を失った、たくさんの人がいたのだといたたまれない気持ちになります。

己斐国民学校

1～2日経ち、己斐国民学校に救護所ができたとのことで、家族の中で一番ケガがひどかった私を連れて父が救護所に連れて行ってくれました。校門をくぐると、かつての桜吹雪はなく、悲鳴とも呻き声ともつかないざわめきが聞こえてきます。背中を焼かれてうずくまる人たちの上に、真夏の太陽がジリジリ照りつけてむせ返るような火傷のにおいでした。

父が順番を取っている間、私は通い慣れた教室を恐る恐る覗いてみました。教室にも廊下にもたくさんの人が横たわっています。みんな火膨れで目が開いていません。生死がわからないような人、うずくまっている人、泣き続ける子どもなどでごった返した教室でした。治療を終えた人は、顔に包帯が巻かれて、口に一切れずつ桃を入れてもらっていました。あの桃のしずくで生き延びた人がいたのだと今でも思います。

亡くなった人はすぐ救護死体用の担架に乗せられて、運動場に運ばれています。運動場はまさに火葬場と化していました。燃え盛る火。照りつける真夏の太陽に、陽炎が立ち、黙々と作業する人の姿が今でも思い浮かびます。吹き上がる煙は人を焼く臭いでいっぱいです。風に乗って、校舎全体を包んでいました。そんな中で、校門の近くでハガキくらいの袋が机の上に並べられていました。食べるものがなくてお腹がぺこぺこだった私は「あ！お菓子配っている！」と思い飛んでいきました。そして、がっかりしました。袋の中身は骨でした。校庭で焼かれた誰の骨ともわからない骨が1つ1つ入れられていました。探しにきた人が、せめてもの供養にと貰って帰っていたと私は後になって聞きました。

壺の中身

私たちが避難していた親戚の家の隣家には大火傷を負って帰ってきた女学生のお姉さんが寝ていました。当時はクーラーなどありません。開け放たれた座敷に寝ていたお姉さんと、枕元に小さな壺がありました。本当に食べるものがなかったので私はお腹がぺこぺこでした。私は遊びながらその壺が気になって仕方ありませんでした。「あの壺には、飴玉が入っているだろうな」と1人で想像していました。ある時、そのお姉さんが壺の蓋を開けるのを見ました。お姉さんは、その壺に真っ黒い血を吐いていました。お菓子の壺ではなかったのです。お姉さんは「起こして。寝せて。起こして。寝せて。」と血を吐きながら亡くなりました。私たちは、酷い熱や吐き気や下痢が何日も続く、急性障害に悩まされました。

頭蓋骨

父と母は親友を探しに8月9日ごろから市街地に出ていました。

炎天下、シャベルを担いで、父と母と親友の奥さんと赤ちゃんは、崩れた水道管から溢れる水を飲み、黒焦げの遺体を跨ぎながら、毎日出掛けました。火が収まっても地面が熱くて歩けないと戻ってきては、また翌日出て行きます。そして原爆投下から1週間後、やっと親友の職場に辿り着きシャベルで掘り起こしてみると、白骨死体が出てきました。誰の骨かわかりませんがその周りを手がかりがないか一生懸命探していると、ちょうど口のところに焼け焦げた印鑑ケースが見つかりました。それを開けると、「栗村さん」という探しあぐねていた本人のものでした。泣き崩れる奥さんの声に驚いた背中の赤ちゃんは火がついたように泣き叫び、父も母もかける言葉もなく涙を流して立ち尽くしていたといいます。奥さんを励ましながら頭蓋骨だけを布に包んで、私たちが避難していた親戚の家に戻ってきました。父の親友、優しかったおじさんの変わり果てた姿をみんなで拝みました。

ぶら下がっていた足

私たちはよく紅葉谷の川にかかった木の橋の上で遊んでいました。当時の遊びはスマホやテレビがないので、地面にマルと数字を書いてケンケンしたり、母からもらった伸び切ったパンツのゴムをつなぎ合わせてゴム飛びをしたりしていました。夕方、むしろで巻いたものを担いで男の人がやってきたので、私たちは少し道を空けて彼が通るのを待ちました。見上げると後ろの隙間から紫色に変色した子どもの足が覗いていました。びっくりする私と一緒に遊んでいた男の子は「あれは山に焼きに行くんよ」と教えてくれました。私は家に帰っても、お布団に入っても、むしろからぶら下がっていた足が気になって仕方ありませんでした。当時はぶら下がっていた足しか見えなかったけれど、むしろを担いでいたのは、この子のお父さんだったということに気がつきました。最愛の子を山に焼きに行く、お父さんの後姿の悲しみに改めて涙しました。

末次君子さん

私の友達で、中学校高校が一緒だった末次君子さんという人がいました。彼女は爆心地から1キロの寺町で、私と同じ8歳のときに被爆しました。中学高校時代は何事もありませんでした。原爆投下から16年経ったある日、腕に斑点ができ、顔は酷く腫れ、高熱が出て、胸に鉛を抱いたように苦しいと言い出し、病院で原爆によるがんと診断されました。治療を受ければ、絶対良くなると決心して、治療しました。彼女が残した言葉を私は今でもはっきりと覚えています。

「あのすてきな服とあの靴で。あの青空を仰いでみたい。そしてシンデレラのように踊ってみたい。私は誰にも文句を言おうとは思いません。良くなろう。生きよう、生きよう。」

一生懸命頑張った彼女も約1年後、25歳の若さで亡くなりました。

夫の体験

私は今から11年前の2013年にピースボート「ヒバクシャ地球一周証言の航海」というものに参加しました。参加するにあたって快く行ってこいと言ってくれた夫が、初めて原爆の話をしました。

彼は、爆心地から2.5キロ、東側の段原新町で被爆しました。親戚のところへ行こうとしましたが、橋という橋が全部崩れていて渡れません。辛うじて残っていた平和公園の近くの相生橋を渡って、爆心地から一番近い本川国民学校のそばを通過して避難したそうです。

その時に、焼け焦げた校舎の内側に、数人の黒焦げの子どもの遺体が張りつき、それを義勇隊の人がトビという道具で剥がしていたのを見たというのです。

彼は父方と母方の祖父を原爆で亡くし、立町にあった親戚一家は骨も残らずに全滅と聞いていましたが、その本川国民学校の話は結婚51年を経て初めて聞いた話でした。原爆の記憶が残酷であればあるほど口をつぐむ、話さないという方はたくさんいます。だから彼も原爆の話をしませんでした。1秒間に280メートルもの爆風で、飛ばされて、焼け焦げて、張りついていた。本当に信じられないような話です。本川国民学校（現：本川小学校）に資料館があります。そこで証言をしている人たちから、「話の記録にもないし、聞いたこともない。本当のことですか？」と聞かれました。私も話をしている手前、責任を感じて夫に「あなたの話は本当なのか」と確認したところ、「こんなかわいそうな話を作り話でできるか。」と言い黙り込みました。彼にとっては大きなトラウマだったようです。

これから

私たちが巡った地球1周ですが、最初は被害者として船に乗りました。地球を巡る中で戦争の残酷さ、醜さを嫌というほど実感しました。一度、戦争が起きると人は加害者にも被害者にもなるということを学びました。私たちはこの広い地球に生まれ、国や言葉は異なっていますが、みんな同じ時代を生きています。人は100年ぐらいいしか生きられません。100年というライフステージ。その中であなたのところにも毎朝、日が昇り、日が沈み、かけがえのない日常がある。みなさんには本当にいっぱい夢を抱いた希望に満ちた未来がある。でも、今、一発の核兵器が使われたとしたら、人類は滅亡に向かいます。だから「被爆体験のお話をする」「世界へ警鐘を鳴らし続けること」は今を生きる私ができることだと思っています。

どうか若いみなさん、未来のことを自分事として考えていただきたいと思います。

広島派遣を終えて



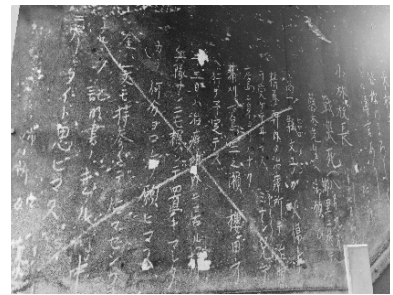
「命があればどんな苦しいことも乗り越えられる」

習志野市原爆被爆者の会 齋藤 路子

今回の広島派遣で一番強く印象に残っているのは、8月6日の「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に参列したことです。酷暑の中日本中からだけでなく世界各国、百力国以上の国々からの参列がありました。世界のいたるところで戦争が起きていますが、日本の広島・長崎の原爆を最後にしたいという思いでの参列だと思いました。

その中で、小学6年生による「平和への誓い」の力強く「今もなお、世界では戦争が続いています。79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。本当にこのままでよいのでしょうか」と問いかけは心に響きました。

この度の袋町小学校平和資料館では、人々が床に散らばるわずかなチョークで、焼けた壁に伝言を記した校舎の階段の壁が保存されていました。



そして、袋町小学校の多くの児童は集団疎開で被災を逃れたそうですが、残っていた百余名の児童、教職員は一瞬にして命を亡くしたそうです。

「ヒロシマ青少年平和の集い」の講話の中で学校の校庭は、畑であった。生きるために食べるものがなかったから。原爆投下後、焼け残った校舎は、火葬場となり、誰のものともわからないお骨の紙袋をいただいて帰った家族たち。



6,300人の子どもたちが亡くなった。生きたくても生きられない人たちがいた。命があればどんな苦しいことも乗り越えられる。若い人たちが核兵器にさらされないように心から願う。未来を自分事として考えてくださいと締めくくられた。

我が団員たちは、積極的に話し合いに参加、立派に発表もしていました。

そして猛暑の中、原爆当時の悲惨な廃墟の上に作られた「平和記念公園」を中心に「平和記念資料館」「原爆ドーム」等を廻り、核兵器の恐ろしさや、戦争の悲惨さをあらためて痛感し、平和の大切さを学び、一瞬にして14万人もの命を奪う核兵器の恐ろしさを痛感したことと思います。

過去の戦争で原爆を使ったのが一番の汚点、次に原爆を使ったら地球は破滅します。今でも世界のどこかで戦争が行われ続けています。世界の人々に再び核兵器が使われることがないように、核抑止に頼る安全保障ではなく対話による平和の在り方を若い団員の皆さんに考えて行ってほしいと思います。

最後にみんなで作った「とうろう流し」、現在この「とうろう流し」は、原爆の残り火を採用して継承されています。世界平和への願いを込めたメッセージが被爆者の霊を慰めてくれますように願いを込めて流してまいりました。



伝え、継承すること

習志野市立第四中学校 教諭 田中 柊輔

この度の広島派遣で私の人生に大きな影響を与えるものとなりました。今まで教科書でしか習ってこなかった広島の惨状を実際に目にし、耳にし、その肌で感じることができました。

習志野市の代表として平和記念式典に参加することで戦争の恐ろしさと平和の尊さを感じることができました。そして、参列する人々の顔ぶれが日本人のみならず様々な国籍の人々で構成されていることも、日本だけでなく多くの国々が過去の世界情勢を憂い、平和を願っていることを表していると感じました。

貴重な広島の体験の中でも鮮烈に印象に残っていたのが、平和記念資料館です。そこには原爆の恐ろしさが克明に残っていました。投下された日に撮られた写真や、絵の数々。それらは原爆の恐ろしさを物語っていました。展示されていた遺品には、死の状況や親族や関係者の一言が添えてありました。その一つ一つを見て、足を進めて行くごとに、被害者の人たちがどれ程生きたかったのかという思いが強くなりました。数多の人々が平和を願い、死んでいったことを改めて感じることができました。資料館には外国人の方々も多く居て、悲惨な状態を表す資料の数々に言葉を失っていたり、とても真剣な眼差しで回っている人が多かったです。

最終日に参加したヒロシマ青少年平和の集いにおいて、被爆者の方に話を聞くことができました。その中で印象に残っているのが“生きているだけで幸せ”という言葉です。この言葉で自分たちが如何に平和な世の中で過ごしているのかを改めて認識しました。79年前には原爆が投下され、焼け野原だった広島中心部は高層ビルが立ち並び、国内外問わず多くの人々が訪れる都市にまで成長を遂げました。この状態に至るまでにどれ程の苦労があったのだらうと思いました。この街の発展こそが先人たちの平和への思いなのだと感じました。

今回人生で初めて広島を訪れました。この派遣を通して、いくつかの場所で平和学習を進めて行く中で知らないことが数多くありました。こんなにも自分は広島のこと、原爆のことを知らなかったのだと思い知りました。また、遠くに感じていた戦争の恐怖を近くを感じるきっかけともなりました。

私には何ができるのかを考えました。私は1人でも多くの人に今回の体験で自分が感じたこと、実際に起きたこと、見聞きしたことを伝えて行くことが私が今後すべきことだと思いました。実際に何が起こったのか、どんな人が犠牲になったのか自分が感じたことを1人でも多くの人に伝え、まずは興味を持ってもらうこと、そしていつかその人自身が現地に赴き、実際に体験すること、それをまた違う人に伝えていってくれることが理想的だと思いました。世界情勢が緊迫する中ですが、1人でも多くの人々が平和を願い、それを伝え、拡げ、次世代に継承していくことが平和への近道だと思いました。

派遣を終えて

習志野市立第一中学校 3年 平川 智規

私は今まで、戦争や原爆の恐ろしさがまるでわかっていなかったと、広島派遣を通して改めて思いました。私は本当にこの平和な世界に生まれて良かったとも思いました。

「1945年8月6日午前8時15分、一瞬にして人々の日常を壊してしまった原子爆弾。」

私は、この言葉を広島に訪れた時から何度も耳にしました。平和記念式典に参加し、被爆者の講演を聞き、原爆資料館を訪れた事で、実際の当時の様子を想像できるくらいしっかりと見聞きできました。一番衝撃を受けたのは、原爆によって命をなくした人達の亡くなり方です。私は、原爆によって即死した人と被爆して体が徐々に溶けていって亡くなる人の2つだと思っていました。しかし、実際には原爆が落ちた地域にいなかった人でも、放射能がしばらく消えなかったことから、遺族を探しに来た人や救助に向かった人なども被爆して、原爆症状が出て亡くなったと言われています。また、原爆が落ちた地域にいて、被爆してもなんとか生き残った人でも、その後に発症した原爆症状により亡くなった人もいと聞きました。原爆症状は、髪の毛が抜けたり、血便が出たり、口から血を吐いたりしたとの事でした。私はこの話を知った時、まともに息が出来なくなるくらい胸が苦しくなりました。

私は、このような原爆の話をなぜ戦後79年もたった今でも聞けるのか、少し考えてみました。それは、戦争を経験した人達、被爆した人達の「二度とこのような事があってはならない」との強い想いが次の世代、またその次の世代、そして戦争を知らない世代へと受け継がれてきた成果だと思います。

今回の派遣を通して私が見聞きした事を、友達や家族に話してみたり、暴力や争いごとが起きないように努めたり、小さな事からでも一つ一つ積み重ねていくことが、先人達の強い想いを受け継ぐ事になり、核爆弾を無くし、紛争の無い世界を目指すために私が出来第一歩なのだと思います。

今回、習志野市平和市民代表団のメンバーとして、広島を訪れる事が出来て良かったです。今回の広島派遣で学んだ事は、私の人生のなかでとても大切な体験となりました。関係者の皆様、本当にありがとうございました。



派遣を終えて

習志野市立第二中学校 3年 田中 ちより

この度平和市民代表団として広島派遣に行かせていただき、とても貴重な体験をすることができました。

まず、平和記念式典では多くの平和への思いや、原爆反対の思いを聞くことができ、その場所にいる参加者全員が同じ気持ちなのだろうと思いました。戦争反対、原子爆弾の保持反対、その意志こそがこの後の平和につながっていくのだなと思いました。

原爆資料館では当時生きていた人々の一人一人の直前まで普通に生きていた様子があまりに鮮明で、やはり原爆は「平和を奪う」という表現がとても当てはまるなと思いました。展示の遺品の一つ一つに、「この人物はこの朝、いつも通り学校へ通っていた」や、「家族と言葉を交わして仕事に行った」など説明が書いてあり、自分の登校している姿と重ねたときに、いたたまれない気持ちになりました。

軽々しく生活を壊してしまえる原子爆弾が憎いです。インタビューを通してやはりそのように感じ、伝えることが大切だと感じたので平和のために自分ができることは全てしたいと思いました。

これからも平和市民代表団として、一人の平和を願う人としてボランティアやその他の活動に尽力していきたいです。

派遣を終えて

習志野市立第三中学校 3年 各務 紘斗

三日間の広島派遣を終えて、私は戦争のない誰もが安心して暮らせる社会にすることの大切さ、そしてその難しさの両方を実感しました。

広島に行く前まで、私たちが戦争・原爆について語り継いでいかなければならないと思っていながらも、どこかに私が生まれるはるか前の出来事であり、自分にはあまり関係がないのではないかという気持ちがありました。しかし、現地に行き様々な形で戦争の悲惨さを学び、感じることで、過去の戦争での経験をここで途切れさせてはいけないと強く思うようになりました。

ただ、現地で資料館などを見学しているときはあまりの悲惨さに目をそらしたくなることもありました。しかし、過去の惨状を風化させないためにもしっかりと向き合うことで、戦争に対して自分の考えを持つことができ、これからの活動につながるととても良い体験をすることができました。

私たちは戦争を体験していないため、戦争について想像でしか語ることはできません。しかし、自分から積極的に学ぼうとすることで、少しでも事実近づけることはできます。戦争について学ぼうとする人が増えるように、今回の派遣で感じたことを身近な人から広めていきたいです。

派遣を終えて

習志野市立第四中学校 3年 伴 悠羽

私が広島派遣に行って1番印象に残ったのは、広島平和記念資料館です。そこには被爆者の悲慘な姿や、核兵器の内部について、爆心地についてなど、たくさんのことが詳しく展示されていました。

当時の写真が沢山並んでいて、その時の風景がどれだけ恐ろしかったのかとてもよくわかりました。広島に行ったことでより戦争の恐ろしさを実感することが出来ました。

この経験をまずは私の身近な人に伝えたい。そして私の身近な人からその周りの人へと語り伝えられたらいいなと思います。もうどの国の人にも辛く悲しい思いはしてほしくないです。

広島派遣を受けて

習志野市立第五中学校 3年 宮下 寛司

今回の広島派遣は、私にとって大変意義深いものになったと思う。写真や画面の向こうでしか見て来なかったものを生で見たことは、貴重な財産になると思う。

原爆資料館には、現実起きたこととは思えない写真がたくさん展示されていた。瓦礫の山、おぞましいやけどの跡、高温で溶けてしまったガラス。人間はここまで残虐になれるのかと衝撃を受けた。

今でも世界では戦争をしているところがある。それで犠牲になっていくのはいつでも兵士と民間人だが、それをやめさせられるのは戦地にいない権力者なのだ。

平和への思いは残念ながら世界標準ではない。だがそれを広めないと、永遠に争いが絶えない。戦争の恐ろしさと愚かさを世界に伝えることがこれからを生きる私たちの使命だと感じた。



想いを繋ぐ

習志野市立第六中学校 3年 近藤 駿介

今回の3日間の広島派遣で私が一番心に残ったことは、広島平和記念資料館です。資料館に展示されているたくさんの生々しい資料を目の前にした私は、とても悲しい気持ちになり、思わず涙が出てしまいました。周りにも涙している方がたくさんいました。

また、大火災により変形したガラス瓶などの展示物などに、『触らないでください』ではなく、『触ってください』と書いてありました。この言葉がとても心に残りました。大切な資料であれば、『触らないでください』が一般的だと思います。しかし、広島平和記念資料館では、想いを繋ぐ、後世に継承する、たくさんの人に知ってもらおうという思いがあるため、『触ってください』としているところにとても感銘を受けました。

他にもたくさんの貴重な経験をさせていただきました。これらのような貴重な体験や想いを、周りの友達などたくさんの人に伝えていき、平和啓発に繋がっていきたいと思います。

派遣を終えて

習志野市立第七中学校 2年 小菅 茉弥

今回の広島派遣で平和記念式典に参列させていただいたり、資料館へいかせていただいたりしたことは、自分の中でもとても貴重な体験になりました。

いろいろな所を見て回って行くうちに、広島には学校で習った「歴史の原爆」ではなく、「事実の原子爆弾」があったんだなと感じました。原爆の影響で、生きたくても即死してしまったり、後遺症によって亡くなってしまったり…原爆ってほんとうに誰も幸せにならないものなんだなと改めて思いました。

無差別に一瞬にして奪われた暮らしや笑顔、そして大切な命がたくさんあります。明日もまた一緒に過ごすはずだった友達や家族を失った人がたくさんいる中で、私たちは今当たり前のようにあるこの生活を何気なく過ごしていますが、本当にこのままで良いのでしょうか。私は被爆者の想いを広島で目や心で聞いて、その状況がいけないということに気づきました。

最初広島へ行く前まで、私はたくさんの疑問を抱いていました。平和ってなんだろう、戦争がないのが平和なのだろうか、今の現状は平和と言えるのか…

でも広島へ行きわかったことがあります。それは「平和な答え」はあったとしても「平和」自体に答えなんてない、ということです。

私が広島へ行き、家族やともだち、先生や身の回りの人に伝えたいことは「戦争の時代にうまれてないから関係ない、しらなくていいと思わないで欲しい」ということです。今を生きている人々に、私たちのような経験をしてほしいと思いますがそうもいきません。だからこそ、現地へ行った私たちからもっと平和の輪を広げて、「今を生きている貴方にも関係あるよ」と伝えていくことが大事だと思いました。

派遣を終えて

千葉県立実籾高等学校 3年 木堂 亜衣理

広島での平和学習では、原爆の悲惨さと平和の重要性を改めて強く感じました。平和記念公園や資料館を訪れ、展示されていた写真や遺品を鑑賞しました。戦争で命を落とした多くの人々の記憶に触れ、平和を守る責任を深く考えさせられました。

また、広島の復興の過程から人々の強い意志と希望を感じ、未来の平和のために自分たちができることを模索することが大切だと思いました。

今回の平和学習は、教科書だけでは学べないことをたくさん学びました。実際にこの学びを他者に伝え、次世代へと引き継いでいきたいです。

派遣を終えて

東邦大学付属東邦高等学校 1年 中村 由佳

私は習志野市の市民代表団の一員として、広島に戦争や原爆のことを学びに3日間行きました。

1日目、地元のボランティアの方1人に平和記念公園の中を案内してもらいました。絶対に家族旅行や修学旅行では聞かないような話をたくさん聞くことができました。被爆して遺体が見つかってない人や、後遺症などで今でもまだ苦しんでいる人が沢山いると聞きました。あまり身近にいないくて実感が湧きませんがもし自分だったらと考えると想像しただけでもとても悲しくなります。また日本人よりも多く外国の方がきていたことにおどろきました。

2日目、平和記念式典に参列しました。今までテレビでしか見た事がなかったけど実際に参加するという、貴重な経験ができました。平和記念資料館では2時間ゆっくりと見学することができました。頭蓋骨のみが残った絵や、全身火傷まみれな絵など見ていられないくらい悲惨な広島が描かれていました。話に聞いたことがあった禎子さんの話などもたくさん書かれていて自然と涙が出てきました。

3日目、他の学校やいろいろな地域から来た人達と戦争や核兵器について考え話し合いをしました。また被爆した本人からお話を聞くことも出来ました。他の地域で起こった第二次世界大戦の被害をあまり知らなかったのであまり注目されていない都市でも大きな被害があったんだなと思いました。被爆者の話では途中から被爆者の声が震えているように聞こえて、何十年もたった今でも記憶は鮮明に残っていて思い出すだけでも辛いんだなと思いました。

この3日間で今までは戦争は絶対にいけない！とただ思っていただけだったけれど、今は戦争の辛さや恐ろしさを知った上で戦争は何があっても絶対にいけない！と思うようになりました。

「平和な未来をつくるために、私たちはなにができるのか？」

～団員に事前学習会と派遣報告会でそれぞれ考えてもらいました～

派遣前

- 戦争について知る。(歴史・被害・恐ろしさ・原因)
- 平和を理解する。
- 世界の難民の状況について知る。
- 見聞きしたことを自身の言葉で後世に伝える。
- 平和・原爆・戦争・核について自由に話せる環境を作り、皆で話し合う。
- 年齢・性別関係なく、平和の尊さを伝える。
- 平和の大切さ、戦争の悲惨さを理解してもらう。
- ケンカせずに皆が笑顔でいる。
- 平和ボランティア活動へ参加する。
- 戦争や核爆弾の保持に対して反対姿勢を示す。
- 考えを身近な人から、広げていく。
- 平和の良さを広め、想いのバトンを繋げていく。



派遣後

- 多くの人に平和の尊さ、戦争の悲惨さを知ってもらう。
- 異文化を理解し、平和な世界のために考え続ける。
- 原爆の影響について後世に伝える。
- 過去の上に成り立っていることを自覚し伝える。
- 自分にできる事で若い世代へと伝承していきたい。
- 力で解決するのではなく話し合う。
- 現地で見聞きしたこと、感じたことを周りに広める。
- 他人の意見や考えを受け入れ、耳を傾ける癖をつける。
- 何気ない日常が続くよう感謝し何ができるか考える。
- 核兵器禁止条約に関心を持つような活動をする。
- 広島に行き実相を知ることをすすめる。
- 戦争や平和について自分の考えを共有する場を設ける。
- イベントや学校で平和の大切さや命の尊さを発信する。
- 他人の幸せを尊重する。

派遣前は、知ることが大切という意見が多かった印象でしたが、派遣後は伝えること、行動に移すことなど具体的な意見が多く出てきました。

平和市民代表団による報告会

代表団の活動目的の一つは一人でも多くの方に派遣で学んだことを伝えることです。
派遣後、団員達は様々な報告を行いました。

『平和市民代表団 広島派遣報告および平和基金募金活動』

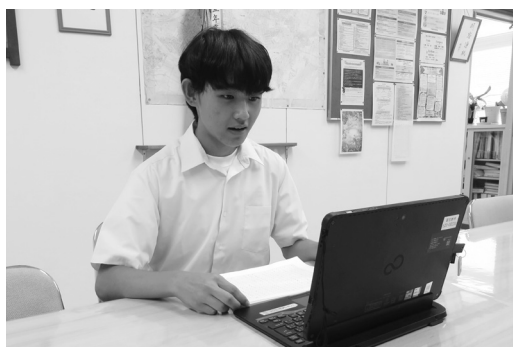
11月9日(土)・10日(日) 食とくらしの祭典

習志野市役所で行われた食とくらしの祭典会場の一角で、派遣時の写真などをまとめた資料を展示し、募金活動を行いました。



《その他団員による発表》

◎近藤団員・・・9月2日 第六中学校にて



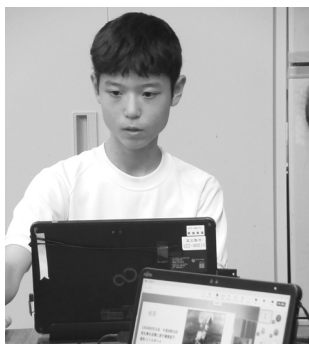
◎小菅団員・・・9月2日 第七中学校にて



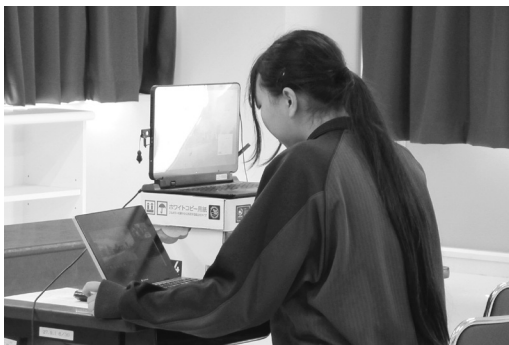
◎平川団員・・・9月6日 第一中学校にて



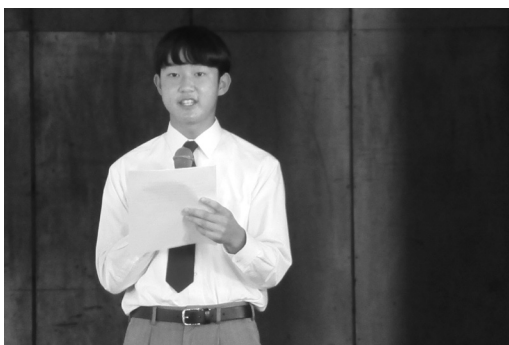
◎宮下団員・・・9月19日 第五中学校にて



◎田中ちより団員・・・9月20日 第二中学校にて



◎各務団員・・・10月15日 第三中学校にて



広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

資 料

式次第

開 式

原爆死没者名簿奉納

式 辞

献 花

黙とう・平和の鐘

平和宣言・・・・・・・・・・67ページ

放 鳩

平和への誓い・・・・・・・・・・69ページ

あいさつ

ひろしま平和の歌（合唱）

閉 式

広島平和宣言

皆さん、自国の安全保障のためには核戦力の強化が必要だという考え方をどう思われますか。また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか。ロシアによるウクライナ侵攻の長期化やイスラエル・パレスチナ情勢の悪化により、罪もない多くの人々の命や日常生活が奪われています。こうした世界情勢は、国家間の疑心暗鬼をますます深め、世論において、国際問題を解決するためには拒否すべき武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていないでしょうか。こうした状況の中で市民社会の安全・安心を保つことができますか。不可能ではないでしょうか。

平和記念資料館を通して望む原爆死没者慰霊碑、そこで祈りを捧げる人々の視線の先にある原爆ドーム、これらを南北の軸線上に配置したここ平和記念公園は、施行から今日で75年を迎える広島平和記念都市建設法を基に、広島市民を始めとする平和を願う多くの人々によって創られ、犠牲者を慰霊し、平和を思い、語り合い、誓い合う場となっています。

戦後、我が国が平和憲法をないがしろにし、軍備の増強に注力していたとしたら、現在の平和都市広島は実現していなかったのです。この地に立てば、平和を愛する世界中の人々の公正と信義を信頼し、再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという先人の決意を感じることができるはずです。

また、そうした決意の下でヒロシマの心を発信し続けた被爆者がいました。「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」これは、全身焼けただれた母親のそばで、皮膚がむけて赤身が出ている赤ん坊、内臓が破裂して地面に出ている死体…生き地獄さながらの光景を目の当たりにした当時14歳の男性の平和への願いです。

1989年、民主化に向けた市民運動の高まりによって、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊しました。かつてゴルバチョフ元大統領は、「われわれには平和が必要であり、軍備競争を停止し、核の恐怖を止め、核兵器を根絶し、地域紛争の政治的解決を執拗に追求する」という決意を表明し、レーガン元大統領との対話を行うことで共に冷戦を終結に導き、米ソ間の戦略兵器削減条約の締結を実現しました。このことは、為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できることを示しています。

皆さん、混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、こうした先人たちと同様に決意し、希望を胸に心を一つにして行動を起こしましょう。そうすれば、核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはずです。必ずできます。

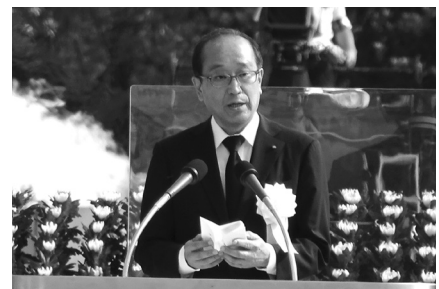
争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで「信頼の輪」を育み、日常生活の中で実感できる「安心の輪」を、国境を越えて広めていくことです。そこで重要になるのは、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し、共感し合うことです。こうした活動を通じて「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。特に次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと「友好の輪」を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、「希望の輪」を広げていただきたい。広島市は、世界166か国・地域の8,400を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和意識の醸成に一層取り組んでいきます。

昨年度、平和記念資料館には世界中から過去最多となる約198万人の人が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への関心、平和への意識が高まっていることの証しとも言えます。世界の為政者には、広島を訪れ、そうした市民社会の思いを共有していただきたい。そして、被爆の実相を深く理解し、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という平和への願いを受け止め、核兵器廃絶へのゆるぎない決意を、この地から発信していただきたい。

NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議が過去2回続けて最終文書を採択できなかったことは、各国の核兵器を巡る考え方に大きな隔たりがあるという厳しい現実を突き付けています。同条約を国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として重視する日本政府には、各国が立場を超えて建設的な対話を重ね、信頼関係を築くことができるよう強いリーダーシップを発揮していただきたい。さらに、核兵器のない世界の実現に向けた現実的な取組として、まずは来年3月に開催される核兵器禁止条約の第3回締約国会議にオブザーバー参加し、一刻も早く締約国となっていただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆79周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、改めて被爆者の懸命な努力を受け止め、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。皆さん、希望を胸に、広島と共に明日の平和への一步を踏み出しましょう。

令和6年（2024年）8月6日
広島市長 松井 一實



平和への誓い

目を閉じて想像してください。

緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。

79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

「ドーン！」という鼓膜が破れるほどの大きな音。

立ち昇る黒味がかった朱色の雲。

人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。

ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。

原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。

言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年経った今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

今もなお、世界では戦争が続いています。

79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、

明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。

本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。

色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。

「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。

仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。

そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和6年（2024年）8月6日

こども代表 広島市立祇園小学校 6年 加藤 晶
広島市立八幡東小学校 6年 石丸 優斗



參考資料



習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典

習志野市では、毎年8月6日、9日の原爆投下時刻に合わせて下記のとおり『原爆死没者慰霊および平和祈念式典』を新習志野公民館並びに秋津公園内「平和の広場」で実施しています。

その式典の中で、習志野市平和市民代表団OB・OGによるスピーチ及び平和の詩の朗読を行っています。（全文を次ページ以降に掲載）

現地を訪れた当時の思いは、今も習志野市平和市民代表団OB・OGの胸の中に強く残り、戦後世代の平和継承者として、より多くの方々に戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを語り継いでいく活動を続けています。

※どなたでも御参加いただけます

- ・黙とう（原爆投下時刻、全市域一斉）
- ・習志野市平和市民代表団OB・OGによる平和への思いのスピーチ、平和の詩の朗読
- ・花輪、千羽鶴の献納（市長、議長、被爆者の会、市民代表ほか団体・個人受付可）
- ・習志野市原爆被爆者の会による献水
- ・参列者全員による「広島」「長崎」モニュメントへの献花

日 時

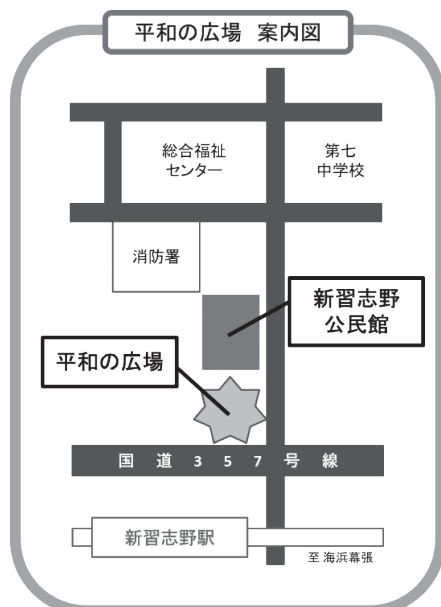
広 島	毎年	8月6日	午前	8時13分～	（原爆投下時刻 8時15分黙とう）
長 崎	毎年	8月9日	午前	11時00分～	（原爆投下時刻11時02分黙とう）

※両日30分程度で終了いたします。

場 所

新習志野公民館 2階 多目的室（式典）

秋津公園内 平和の広場（献花・千羽鶴の献納）



令和6年8月6日

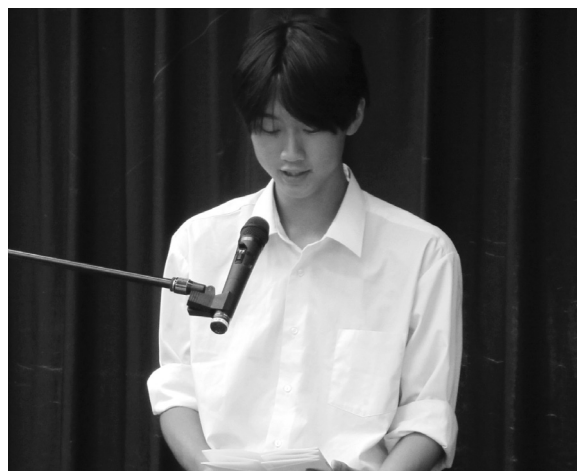
習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念のスピーチ—

令和4年度 平和市民代表団（広島派遣） 団員 冷水 俊介

見渡せば何棟ものビルが建ち並ぶ街、広島。自然と融合した建築に美しさを覚えます。しかしその美しさの中には数多なる人の努力が隠されていました。2年前の8月6日、私は習志野市平和市民団として広島の様式へ参列しました。そこでは、授業では語られることのなかった実際の事柄を目の当たりにし、「恐怖心」すら植え付けられ、そんな時「平和」とは何なのかを考えました。私は広島の原爆資料館をみた際、とてつもない衝撃を受けました。メディアでは観ることのできない、綺麗事では片付けられないリアルな惨劇がそこには待っていました。今の日本は平和なんだと強く実感した時でもあります。平和を一概にいうことはできませんが私は平和とは「お互いを分かりあい認めあう世界のこと」であると信じます。「お互いが分かりあい認めあうこと」ができれば戦争という残酷な出来事もなくなりますし勿論原子力爆弾を投げることもありません。その世界こそが戦争も差別もない「平和」です。そんな平和な世界を私は願います。8月6日。本日を迎え原爆投下から79年目になりました。10万6,825人。これは現在全国の被爆者の方々的人数です。平均年齢は85歳を超えています。若い世代が社会の歯車を回す時代になってきました。これからさき、当たり前のように時代は回っていきます。

何もしなければ、何も行動しなければ、日本は原爆を忘れていくことになるでしょう。あの惨禍を再び起こすことはあってはなりません。だからこそ、私よりも上の世代の方々は私たちの世代にしっかり伝えてくださり、その「おもい」はしっかり私たちに伝わったと思います。そして次は私たちが下の世代へとまた、原爆に対しての「おもい」を伝えていかなければいけないのです。あの惨劇を「絶対」に繰り返さないために。最後になりますが原爆死没者の方々に追悼の意を表し今後の「平和」を願い、私のスピーチとさせていただきます。



令和6年8月6日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念の詩—

令和4年度 平和市民代表団（広島派遣） 団員 川内 未来

「今を生きる人達へ」

私達は忘れてはならない
平和な日常を奪ったこの日を

私達は目を逸らしてはならない
目を疑う悲慘な現実から

私達は学ばなければならない
苦しみの中生き抜いた人々の努力を

私達は日々感謝しなくてはならない
何気ない日常を送れていることに

私達は誓わなければならない
たくさんの命と、悲しみと、苦しみと、葛藤と、勇気と
喜びで作り上げた今の日本を守り抜くと



令和6年8月9日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

－平和祈念のスピーチ－

令和5年度 平和市民代表団（長崎派遣） 団員 松尾 悠大

私は昨年、平和市民代表団の一員として長崎へ行かせていただきました。長崎の現地では知ることをできないことをたくさん学ぶことができました。

まず、長崎に足を踏み入れた瞬間から平和公園などに刻まれた歴史の重みを感じました。原爆資料館を訪れ、展示されている数々の遺品や写真、そして被爆者の池田さんの話を聞くことで、当時の悲惨な状況が鮮明に蘇りました。原爆の恐怖が一つ一つの展示物から伝わってきました。

私たちは本来8月8、9、10日に長崎へ行かせていただく予定でしたが台風の直撃によって平和式典は関係者のみでの参列となってしまいました。私たちの長崎派遣も中止と伝えられました。ですが様々な方がご尽力していただいたおかげで8月24、25日に3日間ではなく2日間という形で現地に行くことができました。

また例年では学生は4人でしたが昨年からは9人の学生で行くことになりました。例年よりも人数が多いことで事前学習でも多くの意見が出てきて、人数が多いことの利点が出たと私は思っています。

79年前の今日この時間に起きてしまった傷跡は今もなお消えることなく残っています。79年という長い月日が経ってしまい原爆のことについて忘れかけてしまっている人もいるかもしれません。そうならないために私たちが平和の大切さを再認識させる必要があります。

私たちには過去の悲劇を忘れずに、未来に向けて平和を築いていく責任があります。そのためには、一人一人が戦争の悲惨さを理解し、平和のために何ができるのかを考えることが重要です。

私が学んだことを皆さんと共有することで、少しでも平和への意識が広がればと願っています。

最後になりますが、長崎と広島の前爆の被害によって亡くなられた方々に追悼の意を表し、短いですが私の平和祈念のスピーチとさせていただきます。



令和6年8月9日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念の詩—

令和5年度 平和市民代表団（長崎派遣） 団員 細山 雅喜

『繋ぐ』

79年前 突然のピカにより
空は暗く 街は炎に包まれ
人々の体は 心は 生活は
一瞬にして その全てを失った

あの日の苦しみを 忘れない
戦争の恐ろしさを 胸に刻む
もう二度と 繰り返さないように

過去と向き合い 現在（いま）に生かし 希望ある未来を繋ぐ
その先に平和は訪れる



一 習志野市平和市民代表団 OB・OG の活動 一

＊ 秋津公園内「平和の広場」の清掃活動 ＊

毎年、習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典の会場である「平和の広場」の清掃活動を、有志の市民の方と一緒にを行っています。

清掃活動は、どなたでもご参加いただけます。広報習志野にて詳細をお知らせしています。(令和6年度は広報習志野7月1日号に掲載。)

○日 時：7月下旬（令和6年度は7月25日（木）に実施）

午前9時30分～（1時間程度）

○場 所：秋津公園内「平和の広場」（新習志野公民館脇）



清掃後は交流会が行われ、令和6年度の平和市民代表団員たちはOB・OGからアドバイスをもらいました。

＊ 習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典での平和スピーチ・詩の朗読 ＊

毎年8月6日、9日に実施されている習志野市平和祈念式典の中で、OB・OGによるスピーチ・詩の朗読を行っています。

戦後世代の平和継承者として、式典に参列された市民の方々へ、被爆地へ実際に赴いた体験を生かし、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを訴え、より多くの方々の平和に対する意識の啓発を担っていこうとするものです。

※令和6年度のスピーチの内容は、72～75ページをご覧ください。

＊「習志野市平和基金」募金活動＊

市で開催される各種行事の会場で、習志野市平和基金の募金活動を行いました。
今後も平和活動の一端として継続して実施していきます。

○主な行事（日付は令和6年度実績）

・8月6日、9日

「習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典」

・11月9日、10日

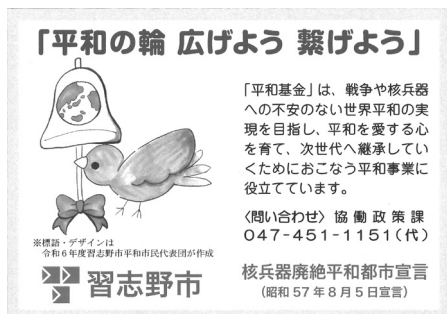
「食とくらしの祭典」



募金活動に併せて、令和6年度の広島派遣の様子を展示しました。

平和基金のPRのため、令和6年度平和市民代表団が

ポケットティッシュのデザインと標語を考えました。



<標語>

平和の輪を 広げよう 繋げよう

＊ 平和交流会への参加 ＊

毎年、その年の平和市民代表団員も含めて、OB・OGが集い交流を深めています。
派遣報告を含め、今後の平和活動や交流会行事のアイディア、近況報告などの情報交換を行っています。

※ OB・OGの皆さんの平和事業へのご協力をお待ちしています。
ご協力いただける方は、事務局へご連絡ください。

事務局：習志野市 協働経済部 協働政策課

TEL 047 (453) 9301 FAX 047 (453) 5578

Eメール kyodo@city.narashino.lg.jp

習志野市平和事業のあゆみ

核兵器廃絶平和都市宣言

昭和57年8月5日

第二次世界大戦の終結後、核兵器の威力は列強の注目するところとなりました。米ソの冷戦に端を発して、核兵器の開発や核軍拡競争が次第に激しくなり、世界中の人々が核戦争への危機感を高め、反戦反核運動が広がりました。日本においても全国的に運動が広がり、昭和57年には各地で「核兵器完全禁止と軍縮に関する陳情」が出され、市町村の「核兵器廃絶・平和の宣言」として実を結びました。

本市では、昭和57年8月5日、県内で初めて、平和の実現は市民生活の最も基本的な基盤であるとして、議会の承認を経て宣言しました。

※宣言全文は1ページにあります。

原爆死没者慰霊および平和祈念式典

昭和57年～

「核兵器廃絶平和都市宣言」を契機に、毎年8月6日、9日の広島・長崎原爆投下時刻に、防災行政無線により市民に呼びかけ、原爆犠牲者を追悼し世界平和を願って黙とうを捧げています。

昭和63年に、秋津公園内「平和の広場」で、市の主催による平和を祈念する式典を挙行して以降、毎年、たくさんの市民が集まり、黙とうと献花を行ないます。捧げられた千羽鶴は、広島市あるいは長崎市へ派遣される平和市民代表団へ託し、被爆地の祈念像等に献納しています。平成22年から、習志野市原爆被爆者の会に献水をお願いしています。また、令和4年度より新習志野公民館2階多目的室にて式典（黙とう、スピーチ等）を行なった後、秋津公園内「平和の広場」へ移動し献花・献水・千羽鶴の献納を行う形へと変更いたしました。

平和映画会・講演会等の開催

昭和57年～平成13年

平和思想の土台となる「豊かな心」を培い、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを次の世代に伝えていくことを目的に、映画会を開催しました。また、市制施行や核兵器廃絶平和都市宣言の周年記念事業として、反戦反核、国際貢献などをテーマとした講演会やコンサートなども開催しました。

核兵器廃絶平和都市宣言記念展・核関係図書コーナーの開設

昭和57年～



毎年、核兵器廃絶平和都市宣言日の前後に、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを次の世代に伝えるとともに、平和について考える機会を提供するため、市内の公民館・図書館等で原爆写真・被爆者の描いた絵や市内の絵手紙サークルの皆さんが平和を想い描いた絵手紙、平和への願いを込めて作成していただいた千羽鶴等を展示しています。

平和祈念標語コンクール

昭和61年

市内の小・中学生・高校生から、核兵器の廃絶と平和をテーマとした標語を募集し、寄せられた741点の作品から、15点が市長賞などに選ばれました。市長賞の作品は、市役所やJR津田沼駅前に掲げられ、人々に平和の尊さを呼びかけました。

平和の広場の整備

昭和62年～

秋津公園の一角に、平和ゾーンが造られ、昭和63年3月旧広島市庁舎の被爆壁を組み込んだモニュメントを設置しました。平成元年7月には、長崎市立山里小学校校舎の被爆壁のモニュメントを併設しました。また、平成2年7月には、広場の表示を兼ねた「核兵器廃絶平和宣言都市」の文字塔を広場の入り口に設置しました。これらを含めてこの広場は、非核三原則を表す三角形をモチーフにしてデザインされています。周辺には市民の名前や絵などが入ったレンガやタイルがあり、市民の憩いの広場となっています。



広島・長崎原爆写真・被爆者の描いた絵の貸し出し

昭和62年～

広島市平和文化センターから提供された広島・長崎の原爆写真や被爆者の描いた絵を学校や団体に貸し出し、市民による原爆展開催を呼びかけています。

核兵器廃絶平和都市宣言記念塔と宣言文の掲示

平成4年～

宣言10周年を記念して、本市の平和への取り組みを内外にアピールするため、平成4年8月に習志野市の玄関であるJR津田沼駅南口広場に、「核兵器廃絶平和宣言都市」の文字塔を建てました。右下部の赤三角は核の脅威を表し、青タワー部は人類が目指すべき平和への道が上に向かって無限に伸びていこうとする様を表しています。青タワーの下部の折れは、核兵器廃絶への取り組みが10年目の節目であることを表現しています。また、市内の公共施設ロビー等に宣言文を掲示して市民への周知につとめています。

被爆65周年にあたる平成22年には、宣言文が破損し、取り外していた公民館へ再度配布し、全公民館に宣言文を設置しました。



平和ポスターコンクール

平成4年

宣言10周年記念事業として、平和の理念を次世代に引き継ぐため、市内小・中学生を対象にポスターを募集しました。265点の応募作品の中から、19点が市長賞などに選ばれ、市役所・公民館等に展示されました。

平和祈念文集『あしたへの誓い』発行

平成5年

風化しつつある戦争体験を記録し、平和教育に活用することを目的として、市民から寄せられた60編の戦争体験文、小・中学生・高校生64名の平和祈念文を文集にまとめ、市内小・中学校・高等学校・大学・図書館等に配布しました。

平和の語り部事業

平成6年～平成7年

市制40周年の平成6年度・戦後50周年の平成7年度の2ヶ年にわたり、学校教育の中で、戦争体験文集に寄稿した市民から中学生に戦争体験を直接語り継ぎ、平和教育の充実を図りました。

平和基金の創設

平成7年4月1日

戦後50周年記念事業として平和基金を創設しました。平和事業の安定継続を図ることを目的に、市の拠出金（平成11年度まで）と市民からの寄付金を積み立てています。平和を愛する心を大きく育て、次世代に継承していくために平和事業の財源に充てています。

広島市・長崎市へ平和市民代表団派遣 平成7年～

戦後50周年を記念し、市内の中学生・高校生を中心とした平和市民代表団を被爆地である広島市・長崎市に隔年で派遣し、現地の平和式典に参列することを大きな目的として、次世代の平和の継承者を育てていこうとするものです。本報告書にもあるとおり、戦争を知らない世代が、現地で被爆関連施設の見学や、被爆者の方から直に話を聞く等の体験を通して被爆当時の実相に触れ、その悲惨さを肌で感じ取ることで、今ある平和を大切に、平和のために自分たちに何ができるかを考え、周囲へ、次世代へ彼らの思いを発信しています。

令和6年度末現在	被爆者の会	中学校教員	中学生	高校生	大学教授	計
広島派遣	15	16	45	35	1	112
長崎派遣	16	15	33	31	0	95
計	31	31	78	66	1	207



令和5年度平和市民代表団の派遣の様子

核実験抗議文の送付

平成7年6月～

平成7年に、包括的核実験禁止条約（CTBT）成立に向けて、国際的な核軍縮の取り組みが進んでいた中、フランスが核実験の再開を決定したことに對して抗議文を送付しました。以来核実験等を行った国（アメリカ、イギリス、ロシア、インド、中国、パキスタン、フランス、北朝鮮）に對し、市民を代表して各国大使館宛てに抗議文及び実験中止要請文を送付しています。

令和6年度には、令和6年5月18日に臨界前核実験を実施していたアメリカ合衆国に對し、令和6年5月23日に抗議文を送付しました。

被爆学生服の展示

平成9年4月～

昭和20年8月6日、広島で被爆し、亡くなられた立本 昇さん（当時22歳）が着用していた学生服を、生前は藤崎にお住まいだった立本 英機さんより寄贈され、ました。現在は市役所ロビーに展示しており、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを訴える資料として市民の皆様に公開しています。



市の平和事業紹介ビデオ、DVDの製作、貸出

平成11年度～

本市の実施している平和活動推進事業を広報番組「なるほど習志野」の特別番組としてJCN 船橋習志野とともに製作したものです。内容は、広島・長崎市派遣の平和市民代表団の報告を中心として、本市の平和祈念式典等を紹介、市民の皆様へ平和を訴えました。製作したビデオ、DVDは、学校や平和活動を行う団体、個人へ貸し出しを行っています。図書館でも貸し出ししています。

長崎被爆体験講話

平成15年9月7日

戦争の悲惨さと平和の尊さを多くの市民の方に受け継ぐため、浦安市協力のもと長崎市より被爆体験者を招き、講演会を開催しました。講師には、当時16歳で被爆し、妹と弟を原爆で亡くした、永野悦子氏（長崎平和推進協会継承部会員）を招きました。

被爆2世の苗木植樹式

平成16年8月9日



広島「永遠の木」 長崎「平和の木」

市制施行50周年を記念し、戦争体験を継承し、平和の尊さ、命の大切さを伝えていくために、被爆2世の苗木として広島市よりアオギリを、長崎市よりクスノキを譲り受け、「永遠の平和」を願いそれぞれ「永遠（とわ）の木」「平和の木」と名付け平和の広場に植樹しました。

被爆体験講話

平成17年7月～10月、平成20年度～

戦争体験者が年々少なくなっていく今日、戦争・被爆体験講話を通じて少しでも多くの若い世代に戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを認識してもらおうと共に、平和意識を育んでいくことを目的とし、平成17年に戦後60周年事業として「平和の語りべ」を習志野市原爆被爆者の会会員のご協力により市内中学校7校で生徒及び保護者を対象に実施しました。

平成20年度より「平和を語り継ぐ出前講座」として小・中学校を中心に毎年実施しています。平成23年度より事業内容をわかりやすくするため、「被爆体験講話」と名称を変更しました。



平和首長会議への加盟

平成22年6月1日

本市では、戦後65周年という節目であり、平成22年5月にNPT再検討会議が開催され国際的にも核兵器廃絶を求める声がさらに高まっていたこと、また平成21年習志野市議会第4回定例会では「非核三原則の法制化を求める陳情」が全会一致で採択され習志野市民・市議会の核兵器廃絶・平和への関心が高かったことから、平成22年5月12日に加入申請書を提出し、6月1日付で平和市長会議（現在の平和首長会議）へ加盟しました。

平和首長会議とは

昭和57年6月の国連軍縮特別総会において、広島市長が世界の都市を越えて連帯し、共に核兵器廃絶の道を切り拓こうと呼びかけ、この趣旨に賛同する世界各国の都市で構成された団体です。平成25年8月には、その活動を市以外の町・村・特別区等へさらに広げていきたいという思いのもと、名称を「平和市長会議」から「平和首長会議」へと変更し、令和7年2月1日現在、166カ国、8,459都市、千葉県内では全54市町村が加盟しています。

被爆体験講話 DVD の作成とホームページでの配信

平成25年3月～

平成24年度に「核兵器廃絶平和都市宣言」30周年を記念して、習志野市原爆被爆者の会のご協力により、被爆体験講話を通じて少しでも多くの若い世代に戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを認識してもらうと共に、平和意識を育むことを目的に、被爆体験講話をまとめたDVDを制作しました。完成したDVDは、市内の図書館で貸し出しするほか、習志野市ホームページでも視聴いただけます。

戦後70年記念事業

平成27年7月2日、10月3日

長い年月を経る中で風化していく戦争の記憶。平和であるが故に潜んでいる危険。今後も平和な未来を守り続けていくために、私たちは何をしなければならないのか。

戦後70年を記念して「過去」と「未来」の二つの視点から記念行事を行いました。

【次世代への継承】 7月2日 習志野文化ホール

市内市立全中学一年生を対象に、戦争を知らない若い世代に平和に対する認識を深め、平和の大切さを考えるきっかけとするため、朗読劇「夏の雲は忘れない - ヒロシマ・ナガサキ 1945-」を習志野文化ホールで上演しました。

【未来への警鐘】 10月3日 習志野文化ホール

身近な関係性に焦点を当て、読売新聞特別編集委員橋本五郎氏をお招きし、「家族や地域で語り合う『これからの平和』～無関心社会への警鐘～」をテーマに講演会を開催いたしました。

核兵器廃絶平和都市宣言40周年記念事業 ポスターデザインコンテスト 令和4年

核兵器廃絶平和都市宣言40周年記念事業として、「あなたが願う平和な未来」をテーマに描くことをきっかけに、平和について深く考える機会となるよう市内在住・在学の6歳から18歳を対象としたポスターデザインコンテストを開催いたしました。応募総数114点の中から、12点の作品が市長賞・議長賞・教育長賞に選ばれ、表彰されました。後日、モリシア津田沼2階に展示を行いました。



広島平和記念公園内「祈りの泉」

－ 令和6年度（戦後79年）－
習志野市平和市民代表団 広島派遣報告書

未来へ平和を語り継ぐ 28

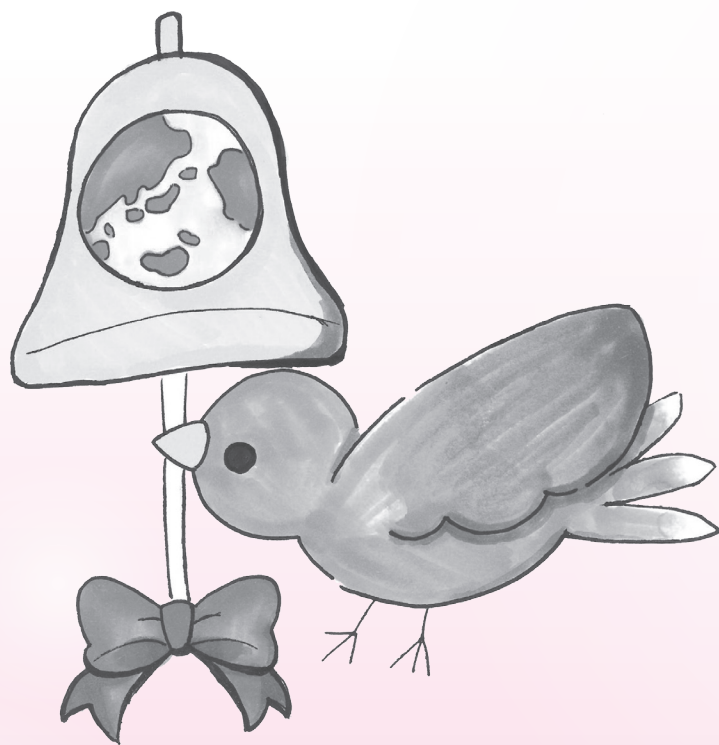
令和7年3月発行

編集 令和6年度習志野市平和市民代表団

発行 習志野市

〒275-8601 習志野市鷺沼2-1-1

電話番号 047 (451) 1151：代表



「平和の輪を 広げよう 繋げよう」

※デザイン、標語は令和6年度
平和市民代表団が作成しました。